

山木兼隆の位牌戻る

国学院大から遺族へ

没後200年 鎌倉末期の製作か

今から840年前の三嶋明神（大社）祭礼の夜、多くの手兵が祭りに出ていた隙を突き、伊豆韮山の蛭ヶ小島に流罪の身だった源頼朝は源氏再興を願って拳兵し、その手初めの戦で、同所山木の山木判官平兼隆の館を攻めた。この夜襲で兼隆は亡くなり、一族郎党は伊豆を後にして各地に逃れたとされるが、兼隆が亡くなってからおよそ200年後に作られたという位牌がさきごろ、40余年ぶりに遺族の元に戻った。50年前、国学院大教授だった樋口清之さん（1909～97年）が「兼隆の位牌に間違いはない」と鑑定した後、行方知れずとなっていた。

（文、写真 特別編集委員・森野宏尚）

位牌は樋口教授に鑑定（24）、八巻同族会6代りに家族に返却された。を依頼した嫡流で所有 目会長の八巻剛正さん者の元指庄師・八巻富雄（81）埼玉県熊谷市、さん（1982年、71歳）山木兼隆研究会代表の八巻（没）当時、東京都在 巻正和さん（73）秦野市住の1人娘である布施 さんが引き取りに東京都京子さん（52）さいたま市、山木判官平兼隆を始祖とする一族が発足した八巻同族会（八巻剛正会長）が国学院大に対し「樋口教授に預けたままになっており、大学にあるはず」と探索を要請。樋口教授は97年に亡くなり、行方が分からなくなっていた。

熱視線

故樋口教授が本物と鑑定

八巻同族会 発足50周年を前に

兼隆の位牌の所有者、八巻富雄さんの生家は山梨県江草村字八巻（現北杜市）。「古里の家に古位牌があり、そこに伊豆の何とか、平の何とかと書いてあった。私が二十歳になったばかりの頃、仏壇から位牌を取り出して読み、自分の先祖は平氏で、伊豆の方から来たのだなと考えることを思い出した」（八巻さん寄稿、1974年6月13日付の日本経済新聞）。

樋口教授は97年に亡くなり、行方が分からなくなっていた。渋谷区の国学院大を訪ねた。位牌を樋口教授に寄託したのは鑑定から9年後、八巻富雄さんが亡くなる1年前の1981年、41年ぶりと次女の和美さん（昭和56）年、41年ぶ

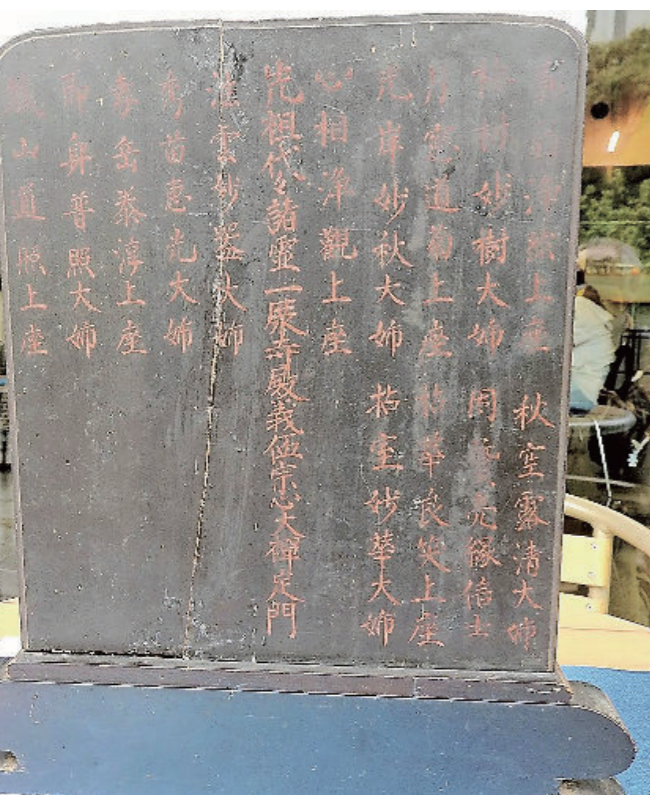
の一族だという。「山木初に東京大へ行ったところ、国学院大の樋口教授を紹介された。『北条政子』を鑑定依頼し、樋口教授は「山木判官兼隆と八巻判官兼高の字の違いは、源氏の名門であることが分かって字を使った可能性があり、間違いなく本物。伊豆で討たれた山木一族が思いがした」（同）。

樋口教授は97年に亡くなり、行方が分からなくなっていた。渋谷区の国学院大を訪ねた。位牌を樋口教授に寄託したのは鑑定から9年後、八巻富雄さんが亡くなる1年前の1981年、41年ぶりと次女の和美さん（昭和56）年、41年ぶ

の一族だという。「山木初に東京大へ行ったところ、国学院大の樋口教授を紹介された。『北条政子』を鑑定依頼し、樋口教授は「山木判官兼隆と八巻判官兼高の字の違いは、源氏の名門であることが分かって字を使った可能性があり、間違いなく本物。伊豆で討たれた山木一族が思いがした」（同）。

樋口教授は97年に亡くなり、行方が分からなくなっていた。渋谷区の国学院大を訪ねた。位牌を樋口教授に寄託したのは鑑定から9年後、八巻富雄さんが亡くなる1年前の1981年、41年ぶりと次女の和美さん（昭和56）年、41年ぶ

の一族だという。「山木初に東京大へ行ったところ、国学院大の樋口教授を紹介された。『北条政子』を鑑定依頼し、樋口教授は「山木判官兼隆と八巻判官兼高の字の違いは、源氏の名門であることが分かって字を使った可能性があり、間違いなく本物。伊豆で討たれた山木一族が思いがした」（同）。



作製した時代に作られたとみられる漆塗りの位牌の表側。江戸時代以前の故人の戒名が記される。

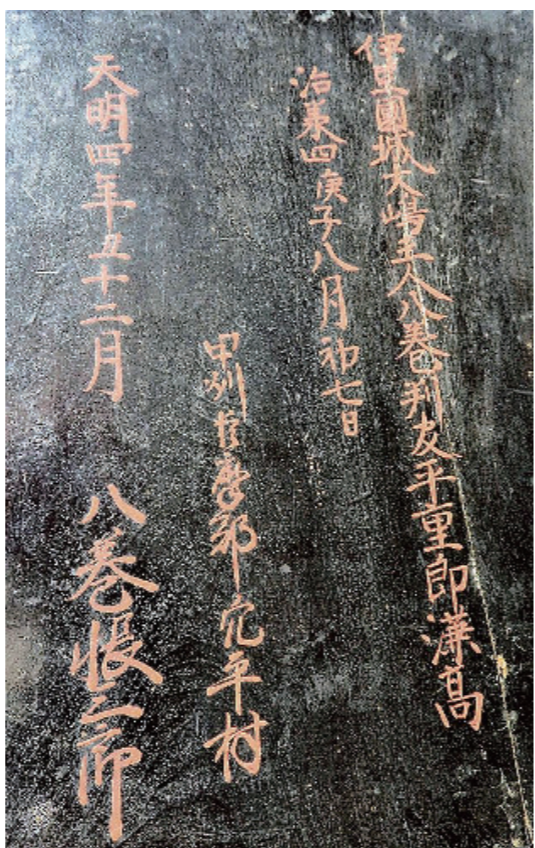
何一つ残っておらず、位牌は唯一のもので、ご遺族の元に戻り大変喜ばしい。国学院大の先生方には大変世話になった」と感謝の言葉を述べた。

位牌は高さ40センチほど、漆塗りのものは裏に「穴平村」「伊豆國城大嶋主人八巻判官平重郎兼高」とあるが、名が複数書かれている。感謝の言葉を述べた。「伊豆國」の一文は、位牌は高さ40センチほど、漆塗りのものは裏に「穴平村」「伊豆國城大嶋主人八巻判官平重郎兼高」とあるが、名が複数書かれている。感謝の言葉を述べた。「伊豆國」の一文は、



今から600年ほど前鎌倉時代末期に作られたとみられる山木判官兼隆の位牌。「一乗（條）寺殿義岳宗心大禪定門」治承四年八月初七日と記されるといふ。

八巻姓を調べた。すると約1400人に同族会東京351人、宮城県322人、福島県202人、神奈川県151人、山梨県129人などが見つかり、大部分は伊豆より北に居る。八巻同族会は兼隆が亡くなった伊豆の国市山木や菩提寺の豆の国市山木や菩提寺の子孫であり、同族会を作ること提案した。これを受け富雄さんは図書に通り、まず電話帳で八巻は少数。足50年の節目となる。



「伊豆國城大嶋主人八巻判官平重郎兼高」と読み取れる江戸時代の漆塗りの位牌裏

頼朝拳兵 最初の標的 山木判官と号した兼隆

山木兼隆は伊勢平氏の血筋を引く平家の武将、和泉守などを務めた平信兼の子。京で検非違使をしてきたが、父との不和（理由不明）で1179（治承3）年1月、伊豆国山木郷に配流された。だが検非違使時代の別当・平時忠が伊豆知行国主になり、伊豆目代に任じられた。兼隆は「山木判官」と称され、伊豆国を支配下に置き伊豆で勢力を広げた。「平家物語」による野川は今よりも東側を流され、祭られている。

八巻家に残る位牌を持つ、兼隆の子孫の八巻同族会初代会長である八巻富雄さんの一人息子布施京子さんと次女の和美さん。東京の国学院大メディアセンター。